2007. 8. 7
本学 筑大図

筑波大学平家部会論集　別冊

筑波大学平家部会
平成十九年六月

追悼小西甚一先生　幻の著『日本文学原論』のこと

——頂いた書簡のお言葉から——

犬井　善壽

小西甚一先生が、平成十九年五月二十六日、日付けがこの日に変った直後に、逝かれた。悲しいことである。日本文学研究のために、悲しんで余りある。

御高著『日本文藝史』全六巻の掉尾を飾るはずの、そして、先生の膝下で学んだ者のみならず、日本文学を好み或いは学び或いは研究する多くの人達がその刊行を鶴首した『日本文学原論』の構想と基礎稿とを携えて、逝かれた。惜しいことである。日本文学研究のために、惜しんで余りある。

先生の御講筵の最末席を汚した犬井の手元に、先生から頂いた書状や葉書が数十通ある。年頭の挨拶への御返書や御慶事御弔事の御挨拶を含む数十通の書簡であるが、中に、『日本文学原論』の構想や内容や御執筆の進捗状況に触れられたものがかなりある。先生のお許しは今となっては得られないが、ここに、概ね頂いた順に、御状に触れられた『日本文学原論』に関するお言葉を紹介して諸賢への報告とし、先生へ哀悼の意を表したい。

本年は『日本文学原論』の執筆に入りますので、本文批判論をまとめることになります。実例については、ぜひ大兄と麻原さんの協力をお願ひしたく、何とぞよろしく。

昭和六十一年の年賀状のお言葉である。『日本文藝史Ⅴ』の刊行が平成四年二月であるから、その完結の六年も前に『日本文学原論』に取りかかられたのである。麻原美子氏（日本女子大学教授。当時）と犬井とに「実例」収集の協力を求めておられるのは、『日本文学原論』を実例を土台にした「原論」としようとされる姿勢が示されている。先生が御論文において常に採られた姿勢である。

次に紹介する書簡は、筑波大学名誉教授室が差出し地になっている。先生は、学界の最新情報収集のため、御退官の後も、しばしば筑波大学の附属図書館におみえになり、名誉教授室を研究室とされた。本状はそのような御来学の折の内の一通である。

目下『日本文学原論』の本文批判論を構想してゐますが、アメリカでは原本へ遡るといふことを目的とするドイツ文献学を過去のものとし、ある時期の人たちがどんな本文を享受したかへ標的が移ってゐますので、流布本こそ本文批判の焦点となります。それで、わたくしも流布本論を一章入れようかと考へてゐますので、そのときには信太君のやってゐる平家の版本などに併はせ、貴兄恵与の材料も大いに使はせていただきたく存じます。（昭和六十二年五月十三日付書簡。横書）

『西行法師家集』の流布本延宝二年版本を翻刻した小著をお届けした折の御返書であるのだが、先生が本文批判において「流布本」を重視しようとされ、信太周氏（神戸大学教授。当時）の『新版絵入　平家物語（延宝五

年本）』（昭和五十七年～）の影印と「解説」のお仕事及び拙著の仕事を活用しようとされる先生の姿勢が示されている。

私家集の流動本文は平家等とまた違った扱ひが必要で　その原理を勘案中とて　好材料を得ましたこと　あつく御礼申しあげます

昭和六十二年一月に『山家集』所載西行歌一首が『覚綱集』所載歌と詠者を異にすることを材料に論じた拙文への御返書（昭和六十二年二月消印葉書）。専ら書写するという書写態度の間に生じる本文変化に対して改作や改編が行なわれる書写本文を「流動本文」と命名される先生は、拙文で指摘した同一歌の私家集間における詠者の相違という事実に関して、私家集の本文研究にあっては『平家物語』のごとき散文における改作とは異なる態度で臨むべきである、と拙論を論されたのである。『日本文学原論』と明記されてはいないが、「その原理を勘案中」とは、『日本文学原論』のことを指していると見て間違いない。

平成元年四月十三日付け、筑波大学名誉教授室から犬井の研究室宛に頂いた書状（横書）。

第5巻（『日本文藝史Ⅴ』。犬井注）は、たぶんこの秋に出るはずです。そこで、懸案の『日本文学原論』に入ります。この別巻では、本文批判が一つの目玉なので、ぜひ平家を採りあげたいのですが、「原論」といふ枠内では、あまり具体論まで出しかねます。それで、具体例は別論文として出したいと考へてをります。そのとき、本文批判に興味のある院生がゐれば、協力方をお願ひいたします。彼らに細かい理論を納得してもらふだけの時間はないかもしれませんので、筋肉労働ふうな協力になるかもしれませんが。

『日本文藝史Ⅴ』と『日本文学原論』の「校正と執筆が同時進行といふ、地獄の何丁目かです」という文言のあるお手紙。「具体例」の収集に大学院生の協力を求めておられるところには、極端な御多忙の中で、具体的事例を以て論じられる先生の姿勢が見てとれる。

やっと本巻が稿了、いよいよ原論に入ります。手始めに山岸先生の記念論文集で本文批判論を書きます。

平成二年の年賀状の添え書き。『日本文藝史』全五巻の執筆を終えられた安堵のお気持ちと、『日本文学原論』御執筆の決意が伝わってくる。「山岸先生の記念論文集云々」は、翌平成三年六月刊行の『山岸徳平先生記念論文集　日本文学の視点と諸相』に寄稿された「本文批判の方法体系―作者の意図は契機になりうるか―」の予告である。『日本文学原論』が、作品批評を事実考証によって支えるという基本姿勢の『日本文藝史』全五巻に対して、「本文批判」を軸にする著作であることを、このお手紙に示しておられるのである。

小生は『日本文学原論』の本文批評にさしかかり、いま十八世紀のベントレイまで来た所です。これからラハマンに入ります。しかし、やはりバワーズ以後の英米流から見ると甘いものです。「流動本文の批判」で当然『平家』を扱ひますので、相談に乗ってください。『原論』ではあまり詳しく書けませんので、別に発表したいと思ってゐます。

平成二年発行の「筑波大学平家部会論集」を御覧に入れた折の御返書の一節（平成二年九月十日付葉書）。先生の本文批判論が、欧州の文献学から英米における本文批判までを通観して、『平家物語』など、わが国の文学作品の本文批判に至る、本文批判の在り方そのものを検討されるものであることがこの文面で分る。しかも、十八世紀までの欧州における文献学についてはこのとき既に検討を終えておられることも、このお葉書で知れる。

数年前にわたくしが麻原さんや貴兄にお話し申しましたやうな、ごく小さい単位に分割する方法で（欧米では常識的ですが）、これを改良し

て拙著『日本文学原論』に採用するつもりの所、貴論を得たので、たいへん助かりました。（中略）拙著はいま、本文批判論のうち、アレクサンドリア時代から一九八〇年代までの西欧学説を紹介し、日本に入り、逆に現代の漱石全集などの校定方法から遡り、江戸時代の版本を西鶴まで論じた所です。これから写本の「定着志向本文」に入り、次いで「流動志向本文」の章になります。そこで「殿下乗合」を使はうといふ寸法です。

『平家物語』諸本の「殿下乗合」の本文について検討した拙文について頂いたもの（平成三年三月二十四日付葉書）。西欧の本文批判論を改良しようとされること、近代文学についての本文校訂の在り方や江戸期の版行本の本文流動も視野に入れた本文批判論であること、「定着志向本文」「流動志向本文」という文献の本文の質を把握しての本文批判論であることなど、志向されるところ、扱われる範囲、本文の扱い方などを示しておられる。

本文批判の第一論文は山岸先生の記念論文集が出ましたので　八月上旬に抜刷を呈上いたします。抜刷の製作に十日ほど要する由にて　こちらは純然たる理論です　先週文藝史第五冊の四校一一四〇ページ分がどさりと持ちこまれ　大汗の態です　頑ばれば十月に出るかも知れません

夏の挨拶への御返書（平成三年七月二十四日消印葉書）。前年の年賀状に御執筆の予定を示しておられた「山岸先生の記念論文集」の御論文が出たことをお知らせ下さったもの。『日本文藝史』第五巻が第四校まで取られたものであること、その校正と『日本文学原論』の本文批判編の執筆が同時進行していたことが、併せて示されている。

「日本語と日本文学」第十五号（平成三年十二月発行）所載の先生の御論文「『平家物語』の本文批判―水平伝承と垂直伝承―」について、麻原美子氏と犬井の二人で先生の原稿と初校との内容や引用の確認と点検とをお手伝いした際に、申し上げた私見に対するご御意見（専ら組み版に関する事柄）を合せて、先の『山岸徳平先生記念論文集』所載論文の抜刷と『日本文学の特質』（同年七月刊）所載の「『平家物語』の原態と古態―本文批判と作品批評の接点―」の複写とをお届け下さった折の添え状（平成三年八月七日付書簡）に、

山岸先生の記念論文集は、抜刷を作ってくれましたので、一部同封します。原理論ばかりで、直接のお役には立ちさうもありませんが、これは拙稿の本文批判論第一部でして、第二部が先日お送りした校正刷りのもの、こんどのが第三部となります。かなり重複もしますが、まとめると一貫した主張になります。これらの要旨を『日本文学原論』本文批判論のうち「流動志向本文」の章に入れます。

とある。『日本文学原論』の本文批判編が三部仕立てで、第一部が『山岸徳平先生記念論文集』所載論文、第二部が「日本語と日本文学」第十五号所載論文、第三部が『日本文学の特質』所載論文を骨子とすることが示されている。『山岸徳平先生記念論文集』所載論文において提示された、「流動志向本文」と「定着志向本文」とで異なる本文伝承の現象を同一視してはならないこと、「日本語と日本文学」所載論文において示された、「水平伝承」と「垂直伝承」という相対する本文伝承の在り方を認識すべきこと、そして、『日本文学の特質』所載論文において示された、本文批判と作品批評との隔別とその接点を確認すべきこと、以上、『日本文学原論』の全体像が、この書状において示されているのである。

また　麻原さんへの校正刷りについて　お手数を煩はしましたこと申訳ありませんでした　これも　御礼申しあげます

平成三年暮れの挨拶に対する御返書（十二月二十三日消印葉書）。『日本文

学原論』の柱になるはずの「日本語と日本文学」第十五号所載の先生の御論文の校正刷について麻原美子氏と内容確認のお手伝いをした折に、その校正刷を麻原氏に犬井がお届けしたことの謝意を伝えられたもの。先生は、論点や作品本文の引用などの点検をその分野を専攻する人に依頼されることがあった。異種本の多い『平家物語』などについては麻原氏がその任に当たられることがあり、犬井も時折お手伝いした。山下宏明氏（名古屋大学教授。当時）に点検を依頼したら論に何の問題もないという返事だったよ、と仰ったこともある。ことほどさように、先生は御自分の論の論点や引用の正確を期されたのである。

本日はまた暑中見舞もいただきましたが　この二日ほどは涼しくて一息ついてゐます　先日来の猛暑中は　ドイツ語で泡を吹きましたが　この次はフランス語で　横文字症候群といったところ

平成四年に差し上げた暑中見舞い状への御返書（八月四日付葉書）。『日本文学原論』という言葉はないが、その御執筆に西欧の文献を参照あるいは批判なさっていることが伝わってくる。事実、その年の暮れに頂いたお葉書（平成四年十二月二十七日消印）に、

『日本文学原論』はインガルデンに七箇月を要しましたが　これからロシアフォルマリズムに入ります　これに比べると　本文批判論はまだしも楽でした　しかし　平家の論は　具体的な例を示す責任がありますので　よろしく願ひます　信太君の便宜を考へると　春休みは如何でせうか　場所も御相談いたしたく存じます

とある。この書状によって、『日本文学原論』が作品批評論と本文批判論の二本立てであることが分る。「信太君云々」は、『日本文学原論』の具体例収集と提示などのために、信太周氏や麻原美子氏らと合宿研究会を行い、先生の御指導を頂きたい、とお願いしたことへの御提案である。翌平成五年は犬井の半年間の外国出張などあり、合宿研究会を開くことはできなかったが、帰国の挨拶に答えて下さったその年の十一月一日付けのお葉書に、

懸案の平家本文批判は　大学会館あたりに合宿して　徹底論議は如何ですか　もちろん春か夏かの休暇中ですが

とあり、年末十二月二十七日付けのお葉書にも、その合宿研究会について触れられ、

年内にはいまいましいハイデガーの悪文と手が切れさうで　張り切ってゐます　夏休みあたり　大学会館にでも合宿して　麻原・信太両君を交へ　平家十二巻本の本文批評をやりませんか　完成にはコンピュータを要しますが　原理はノートと鉛筆ですみます

と、先生の頭の中で既に合宿研究会の具体的な構想が出来上がっているということをお知らせ下さり、このお葉書で、合宿研究会の開催計画が急速に具体化に向けて進み出した。

先生を座長とするその合宿研究会は、先生が「『平家物語』本文分析研究会」と命名され、

第一回　平成六年八月二十三日～二十五日　於　筑波大学大学会館　談話室

参加者　小西甚一先生・麻原美子氏（日本女子大学）・信太　周氏（神戸大学）・稲葉二柄氏（大妻女子大学）・名波弘彰氏（筑波大学）・犬井（筑波大学）

第二回　平成七年九月五日～七日　於　筑波大学大学会館　談話室

参加者　小西甚一先生・久保木哲夫氏（都留文科大学）・麻原美子氏・信太　周氏・稲葉二柄氏・犬井　（勤務先は、当時）

の二回、開催された。第一回は、先生の基調講義・参加者の質疑と先生の

応答・先生の補遺講義・次年度研究会までの調査検討事項（先生は「宿題」と呼ばれた）の提示、第二回は、先生による前年度研究会の整理および基調講義・参加者による宿題等の報告と討論・先生の総括講義、というプログラムで、『日本文学原論』の本文批判編の基本的理論および『平家物語』本文批判の章の基本的理論と全体像が提示され深められた。欧米の文献が机上に並び、横文字の言葉が飛び交う、それでいて『平家物語』を離れない都合六日間であった。

平成五年度韓国日語日文学会大会における先生の御講演を論文としてその学会の紀要に寄稿された「解釈と批評の原理」（「日語日文学研究」第二四輯・一一九四年〈平成六年〉六月三十日発行）が、この合宿研究会の参考論文として配布され、討論の材料の一とされた。

この二回の合宿研究会の間、第一回研究会の後には（平成六年十二月三十日付葉書）、

明けて平成七年から　わたくしは非常事態に入った宣言をします
『日本文学原論』に専念するためです　講談社との折衝で　平成八年十一月刊となりましたので　それまでの間はすべての原稿謝絶　会合にも出ません　但し　平家の件だけは例外です　あれは『原論』の一部ですから

との宣言があり、第二回合宿研究会の前には（平成七年七月十日消印葉書）、

本文批判合宿は　本年　どうも平家そのものよりは「失はれた本文と系譜法の限界」が主になりさうです　私家集にも役立ちさうなので
久保木君あたりにも加はってもらったらどうでせう　貴意如何

という御提案がある。『日本文学原論』の本文批判編の根幹が、散文にも韻文にも関わる、文字通り「日本文学」全般に及ぶものであることが示されているのである。

その平成七年の「師走二十八日」という日付けのあるお葉書に、

夏の平家合宿にて試みたりし訳語　不適切なるもの少なからず　改訳を思案中にて候　そのうちお届け仕るべく候　本日講談社のお偉方が来宅　遅延の日本文学原論を一日も早くとの膝詰め談判　あな越しがたの年の瀬や！

と、候ふ文で、合宿研究会で使われた原書の訳語の訂正を予告しておられる。『日本文学原論』御執筆の最中であっても、随時、術語の在り方に心を配っておられるのである。

この合宿研究会に関わる先生の御連絡の書状やお葉書は、紙幅の都合で割愛する。

なお、平成七年の先生の年賀状には、

懸案の『日本文学原論』は本年もやはり懸案です。それでも、最大の難物ハイデガーをどうやら退治しましたので、あとは順調に行きさうな感じです。

と印刷挨拶がある。これは、年賀状を頂戴した皆へのお言葉であるが、更に、ペン字で、

本年は満八十歳を迎へますので、右の本にて創著の研究書は大尾とします。論文も。あとは自編の著作集を考へてゐます。

という添え書きがある。先生の『日本文学原論』への思いを知る添え書きである。

御入院御加療を仄聞し水菓子をお届けした返礼のお葉書（平成八年七月十四日消印）は、

病人食ではとても身体が保たないので、担当医に掛け合ひ　十三日（土）十四日（日）の両日　帰宅しました　すこしアルコールを入れ

ないとね　恰も　チョウサー作品の本文批判を手掛けてゐますので
デカメロンは好適

と、洒落を交えてのものである。御体調が不調の折でも、本文批判など、『日本文学原論』のことをお考えであったことが伝わってくる。

同じ年の秋に頂いた、諸方へ出されたワープロ印字による退院の御挨拶——犬井宛には「十月二十二日」というペン書きの日付けがある——の中に、

中休みの形となりました『日本文学原論』は、今のところ清書ずみ原稿および下書きが予定枚数のおよそ八割ほど机上に在りますけれども、当分は手を着けかねます。しかし、かねて申しあげましたごとく、わたくし最後の新著となりますので、全体としての質をあまり落さずに行きたいものです。

とある。この書簡の余白に、その直前に先生の御高覧に供した『夫木抄』所載実朝歌の『金槐集』の本文との関連についての拙文への謝辞があり、更に、その拙文との関連で、

わたくしの『原論』で本文批判に『平家』は必ず採りあげますが、私家集はどの程度まで言及するべきか、まだ考へる段階ではありません。

と言い添えていて下さる。御入院御加療などあって、前年の第二回合宿研究会で示された私家集等を含むお考えや検討が確たるところに至るにはいささか時間を要したのである。

平成九年に頂いた年賀状には、印刷文面に、前年六月からの入院加療のことを示され、

昨年の六月ごろ、宿題の『日本文学原論』が清書稿・下書き稿を併せおよそ八割が出来てをり、もう一息といふ所での発病、まことに残念でした。しかし、再診の所見からは、明年の初夏ごろに『原論』の完稿が期待できるやうです。

と、『日本文学原論』執筆中断について触れておられる。更に、ペン字で、

しかし相手は欧米の曲者ぞろひ、如何相成りますか。
どうやら命拾ひをしましたので、なんとかケリをつけたいものです。

と添え書きをしていて下さる。

同年七月十五日の消印のあるお葉書には、「回復順調」で「十月ごろから戦線復帰が可能なやうです」とあり、

『日本文学原論』は　国文学界にとって　超辛口になりさうです

というお言葉が添えられている。

平成九年十二月二十一日付けのお葉書に、

一昨日　講談社からお二方が『日本文学原論』の完稿をやんわり御催促のため光来なさいました　小生の返事は至って正直　「平成十一年中には出るでせう」　しかし約束は守ります

とある。出版社の申し出もあり、『日本文学原論』の刊行年を先生御自身が決められたのである。

平成十年七月二十二日の消印のあるお葉書には、

宿題の『日本文学原論』　やっと原稿整理の段階に入りました。数年前に書いたことが我ながら不備の点多く、かなり手間取ってゐます。
秋には筑波へ伺ひたく存じます。調べ事が多くて。

とある。以前は、先に紹介したように、しばしば筑波大学の図書館で調べ事をなさった。長期間に亘る構想から執筆ゆえ、既に稿了にされた箇所の修正や改訂が多く、しかも学界の研究状況の把握も必要で、「筑波へ」とは「筑波大学附属図書館へ調べ事に」の意であり、この年もそのご意向であると伝えられたのである。『日本文学原論』の完成のために。

「十二月一日付の貴翰拝誦」に始まる同十年十二月八日消印のお葉書に、

九月十九日の学会の後で、名波君から『日本文藝史』と『日本文学原論』の完成を祝ふ集ひをしてはどうかと申されましたので、平成十二年にしてくれないかと頼みました。全巻が完成するのは、たぶんその年の春ごろです。原稿は明年の三月ごろ終へられさうですが。

とある。翌平成十一年三月頃の脱稿を目指しておられたのである。同十年十二月三十日付けの書簡でも、脱稿の予定の時期に触れて、次のように知らせていて下さる。

わたくしは歳末も年始もなく、当面の原稿書きに追はれてゐます。予告を幾年も過ぎた『日本文学原論』が、まだ稿了しないからです。しかし、どうやら明年の春ごろには講談社へ渡せさうなので、いっそう精が出るわけです。

「急がば廻れ」といふのは、壮年期までのことで、わたくしには、もはや回るだけの餘地がありません。体調は良好なのですが、頭の「切れ」は月単位で失せてゆきますので、少しでも作動する間にまとめなくてはと考へてをります。

いま本文批判の項を見直してゐますが、欧米でいろいろ新説が出るので、追加や修正のため数十日を要しました。年内には終へますが、あとは解釈理論における「作者の意図」との整合性をチェックしなくてはなりません。

それでもまあ、机の前に坐ってゐられるのは幸ひと申さなくてはなりますまい。

お手紙は温泉療治の話へと続くが、それも、「一段落したら」のこととされるのである。

翌平成十一年の年賀状に印刷された年頭のお言葉の中に、

わたくしは、幸ひ体調好調で、相変はらず原稿書きにいそしんでをります。宿題の『日本文学原論』ですが、どうやらこの三月あたり脱稿できさうです。もっとも、大冊の事とて、刊行は明年の春あたりになるかもしれません。

とあり、平成十一年春脱稿、平成十二年刊行を目指しておられたことが分る。

平成十一年の秋、先生は、文化功労者として顕彰を受けられた。暮れもおし迫った十九日に、筑波大学国語国文学会主催で、その受彰祝賀会が催された。その会の庶務を担当しただけの私にまで謝意のお葉書を下され（平成十一年十二月二十八日付）、

すこし暖かくなる頃、筑波へも調べ事に参上いたしたく存じてをります。

という文言を添えて下さった。例の附属図書館への調べ事という先生の意欲なのである。

明けて平成十二年の年賀状の印刷された年頭の御挨拶の中には、

わたくしは幸ひ齢相応の健康に恵まれ、原稿書きと校正の日常を愉しめさうです。

というお言葉がある。

文化功労者受彰祝賀会の折に撮った写真のアルバムなどを池内輝雄国語国文学会会長（当時）のお供をしてお宅へお届けしたことへ頂いた礼状（平成十二年二月十五日付）にも、『日本文学原論』のことが触れられている。

幸ひこのところ健康は年齢にいくらか不相応なほどでして、毎日原稿書きに精を出してをります。題して『日本文學原論』。これを以ってわが著作は千秋楽と仕ります。「小西もこの程度の本を書くやうになったか」と愍まれるやうな醜態を招かないためには、余力を残しての幕切れにしたいわけです。

先生の精力的御執筆が窺えるお言葉である。

平成十二年二月、麻原美子氏のお手伝いをして『長門本平家物語の総合研究　第三巻　論究篇』を編み、両人で先生に一本を献呈した折にいただいた書簡（三月十三日付）に、次のようにある。

いま執筆中の『日本文学原論』では本文批判論に多くのペイジを割きますが、中心になるのは『平家』でして、貴著はおそらくこの章の屋台骨を支へてくれるはずです。

（中略）かなり忙しい数週を経験しましたけれど、それもこの二月あたりで打ち上げとなりましたので、あとは原稿書きに専念できます。幸ひ年齢相応の健康に恵まれてゐますので、格別の支障さへ無ければ、本年末あたりに稿了できさうです。もっとも、そのあと、校正といふ労働が控へてゐます。英文はもちろん、独・佛語のほか、ギリシア語・ラテン語も頻出しますので、他人任せにはしにくいわけです（身から出た錆？）。

欧米の文献を、その理論を紹介され批判されるだけではなく、生のまま引用されたり術語や人名について欧米の表記のまま提示されることの多い『日本文学原論』なのである。

平成十二年七月十日消印の書状は、かなりの長文であるが、『日本文学原論』の琴線に触れるところがあり、時候の挨拶と書状の結びのお言葉は省略して、全文を紹介する。

その後は別状なく、原稿書きに専念――と言ひたい所ですが、時どき脱線も仕ります。去る六月十八日、国立能楽堂にて狂言「仁王」に出演いたした件など（そのお稽古を含め）、大脱線だったかもしれません。しかし、以後は慎しんでをりまして、宿題の『日本文學原論』に集中してゐます。目下は本文批判の章ですが、何を「正しさ」の基準とするか――について、従来の論でいはゆる「科学的」な客観性を信頼する態度が、じつは科学的でない――と指摘するべく、自然科学における事実の客観性がどんな手続きを取るか、国文学者にも再思三考してほしいことの要望です。

民俗学についても、自然科学的な思考のできた柳田国男は、危ない所を注意ぶかく避けて通りますが、折口信夫は　柳田を信奉しながら、実は大きく踏みはづします。折口は詩の領域に片脚を踏みこみながら、他の脚で事実に立たうとしたのですから、支離滅裂に陥りました。こんな話が相次ぎますので、国文学者諸公には耳の痛い話となります。当然、好感をもっては迎へられないでせうが、八十歳を過ぎますと、いちいち諸方の御機嫌を伺ってゐる余裕など無くなり、放言居士化するのも、やむを得ないでせう。

さういった放言ホルモンが老化現象への有効性を発揮してくれるかどうか、本が出てみないとわかりませんが、わたくし自身は、かなり愉しみにしてゐます。

平成十二年十二月四日付けのお葉書は、拙文所載の本をお届けしたことへの御返書で、

拙著『日本文学原論』のため必要な欧米論文や刊書を調べるべく、去る十一月二十八日・二十九日の両日、筑波へ参上しましたが、その仕事が忙しくて、御挨拶もできませんでした。

とある。この時期に至っても、御著書の論述の徹底を期して、筑波大学の附属図書館で調べ事を続けておられた先生なのである。

平成十三年の年賀状は、印刷の挨拶文に「筑波天狗」の朱印が押印されている。その中で、

仕事の方は、久しい宿題の『日本文学原論』が遅れながらも進捗し、たぶん本年内には稿了できさうです。これをもって研究的な新著の公刊は千秋楽といたします。書くべき事は書きつ――の心境です。

と、『日本文学原論』の稿了を予告され、『平家物語』の平知盛の「見るべき事は見つ」という科白をもじって御心境を示しておられる。これは賀状を頂いた皆の知るところである。

平成十三年四月、『金槐集』の抜粋本の本文についての報告文をお届けしたことへの御返書を頂いた（四月十九日消印葉書）。そこには、

ちやうど拙著『日本文学原論』で本文批判の章をいちおう稿了した後、なぜ本文が変はってゆくかをうまく説明できなかったので、書き直さうと考へてゐた際とて、たいへん助かります。「著作性本文形成」「書写性本文変化」の区別は、きはめて明確な御指摘ですが、二字ぐらゐに縮められないかと思案中。

というお言葉がある。ここに至っても『日本文学原論』の原稿の修訂や書き直しを考えておられるのである。「著作性本文形成」云々は拙文中に用いた術語への御注文で、どのように縮めて御著書に使って頂けるのか、犬井は大きな期待をさせて頂いたお言葉であった。

平成十三年十二月二十九日の消印のあるお葉書は、暮れの挨拶に答えられた御返事。

小生は幸ひ健康に申し分なく、原稿書きが続きます。

とある。御健康御回復と御執筆進捗を心から喜んだものである。

平成十四年二月十四日付けの書簡は、信太周氏と校注・訳を担当した『保元物語』『平治物語』の一本を両人でお届けしたことへの御返書であるが、後半に、

もっとも、小生、目下『日本文学原論』のため　蟹行文字の本どもに煩はされてをり、日本へ帰郷するのは明年ごろの仕事ですけれども、時には日本文の業績に接しませんと、国籍不明のタワ言になりさうでして。

と、『日本文学原論』のために欧米における研究の検討にかかりきりであられることが示されている。

平成十四年七月十六日消印のお葉書には、

小生は相も変はらず『日本文学原論』と取り組んでゐますが、何分にも老齢の事とて、欧米の文学理論書どもをすらすら理解するわけにはゆかず、大きい辞書の助けを借りての悪戦苦闘中です。

とある。『日本文学原論』の論述が欧米の理論の吟味とそこからの発展という要素をも併せ持つものであることは、これまでも幾通かの書簡のお言葉を通じて紹介したが、ここに至っても、その基本を徹底しておられることが分る。その頃、或る方の御葬儀のあと、先生を音羽の護国寺からお送りしたことがあった。先生お住まいの保谷までお送りしますと申しあげたところ、例の『日本文学原論』のための原書を池袋の書店で求めるからと、行き先を池袋へと仰った。書簡のお言葉ではないが、一つの回想として紹介しておく。

平成十四年十一月五日の消印があるお葉書は、『新時代不同歌合』所載の実朝歌の本文に関する拙文別刷を御覧に入れた際の先生のお返事。そこには、

このところ、拙著『日本文学原論』の本文批判考において、本文流伝の諸相を採りあげる予定で、いろいろ材料を整へてゐますので、高説は多大の助勢をお与へくださったわけで、重ねてお礼を申しあげます。

と書き添えてある。種々の材料で具体的実例を示して展開される本文批判編であることがここでも示されているのである。

平成十五年二月二十四日付けのお手紙は、拙宅の表札の御揮毫をお願いしたことへ御快諾を頂いたもの。後半に、

この所、年来の大宿題『日本文學原論』と格闘中なれど、学界へ老害を振り撒く結果となりかねず、冷やひや物にて候。まづは取りあへず拝承の御挨拶まで。

とある。かような私的なお願いの御返書にまで『日本文学原論』に言及される先生である。

その表札の材質や寸法など細部についてお尋ね下さったお葉書（平成十五年三月六日消印）が、先生に頂いた御自筆書簡の最後である。『日本文学原論』には触れられていない。

以後は、奥様御自筆のお葉書か、ワープロ印字の文面で、

甚一

という御署名のみが先生の手、という先生からの書簡である。

「甚一」という署名だけが御自筆のお葉書の中では、平成十五年十二月二十三日の消印があるものに、

私は原稿書きなどで毎日忙しくすごしております。

とある。「原稿書き」とは『日本文學原論』の原稿を指すのであろう。

奥様からのお葉書は、

・主人も腰痛の持病と体力が少々落ちましたが、口は達者でございます。（平成十五年七月十八日付）

・この度、主人の卒寿の会について、大変御世話をおかけ致しまして有難うございます。何分にも老化致しておりますので、無事皆様方と過せます様、念じて居りますが、念のため、次女も付添として参るつもりです。よろしく御願い申し上げます。（平成十六年七月十八日に開催した「小西甚一先生九十賀の会」についての御連絡。平成十六年七月十四日付）

・本人もだんだん老化し、字を書く事も不精致し　失礼の程、御許し下さいませ。（平成十六年九月。先生著『世阿彌能楽論集』をお届け下さった折の添え状）

・口は達者ですが老化は進み、すっかり筆不精となりまして、代りまして厚く御礼申し上げます。（平成十六年十二月二十九日付。暮れの挨拶への御返信）

・本人　口は達者ですが、筆力が衰え、代りまして厚く御礼申し上げます。（平成十七年七月二十七日付。夏の挨拶への御返信）

・本人も老化し　歩行も杖が必要で、字を書く事が不如意で　代りまして厚く御礼申あげます。（平成十七年十二月三十日付。暮れの挨拶への御返信）

・字を書く事をしなくなり、代りまして　御便り致しました。（平成十八年七月十九日消印。暑中見舞いへの御返信）

と、時々の先生の御様子をお知らせ下さる文面である。平成十八年の暮れには、奥様が直接お電話を下され、先生はお元気でお過ごしの由、家内にお伝え下さった。

平成四年二月刊の『日本文藝史Ⅴ』の奥付の後に掲げられた「『日本文藝史』刊行予定」に、「別巻（日本文学原論・付　全巻索引）続刊」とある。その六年前の昭和六十一年の年賀状に、『日本文学原論』の執筆宣言があった。爾来二十一年、その間に『日本文藝史』全五巻が完結し、平成八年夏の御入院御加療があり、平成十五年以降、奥様のお言葉によると「字を書く事も不精」になられ「字を書くことをしなく」なられるまで、先生は、

常に、『日本文学原論』の御執筆に専念しておられた。御講筵の末席を汚しただけの私ごとき者に、書簡を通じて、その構想や内容、また、原稿の進み具合をお示し下さったことに、先生の『日本文学原論』に寄せられたなみなみならぬお心の程が顕われているのである。

先生のお便りのお言葉の端々から窺える『日本文学原論』の構想と内容を整理してみる。

先ず、この著の「目玉」は本文批判論であるが（平成元年四月十三日付書簡）、作品批評論も展開される（平成四年十二月二十七日付葉書、平成十二年七月十日付書簡等）。

本文批判論の中心的材料は『平家物語』であるが（平成元年四月十三日付書簡、平成二年九月十日付葉書等）、私家集等韻文も視野に入れておられる（昭和六十二年二月付葉書、平成七年七月十日付葉書等）。その本文批判論は、具体的実例の分析を基盤とするもので（平成元年四月十三日付書簡等）、その博捜や提示について協力を求めておられる。

また、欧米における本文研究の成果を採用しあるいは批判するために、諸外国の研究文献を数多く検討され（昭和六十二年五月十三日付書簡等）、また、度々筑波大学附属図書館へ足を運ばれ、日本文学研究の最新の諸成果を調べておられる（平成十年七月二十二日消印葉書等）。新しい研究を知った上で御自分の説を展開しようとされる、正確を期された御論なのである。原稿や校正刷の段階で点検をその分野を専門とする人達に委ねられたのも、論の正確を期されてのことである。更に重要であるのは、既に御執筆を終えられた問題についても、常に振り返り、加筆を試みられ、不備の修正を行っておられる（平成十年七月二十二日消印葉書等）のも、正確を期された御研究であることを示している。

その本文批判論の根幹は、文学作品の本文は大別すると「流動志向本文」と「定着志向本文」の二様があり、それぞれに「水平伝承」と「垂直伝承」という本文伝承が見られる、ということを認識して本文批判を行う必要がある、という考え方である（昭和六十二年二月消印葉書、平成二年九月十日付葉書、平成三年八月七日付書簡等）。耳慣れない術語ではあるが、文献の本文とその伝承の極めて論理的な把握である。

作品批評の原論についても、インガルデン・ロシアフォルマリズム・ハイデガー等の名前が示されていることで分るように（平成四年十二月二十七日消印葉書、平成五年十二月二十七日付葉書等）、本文批判論の場合と全く同様の御検討と分析と提言が行われている、と見て間違いない。

先生がこのような手続きにより分析と検討を行って来られた『日本文学原論』が、実際の文言としてその検討や提言を拝読できないことは、残念と言う外ない。ただ、『日本文学原論』の本文批判編の「手始め」（平成二年年賀状添書）に発表された論文が幾編か残されている。それが三部構成の論の基幹になっているのである（平成三年八月七日付書状）。

本文批判の方法体系―作者の意図は契機になりうるか―　（第一部）
（『山岸徳平先生記念論文集』所載）

『平家物語』の本文批判―水平伝承と垂直伝承―　（第二部）
（「日本語と日本文学」第十五号所載）

『平家物語』の原態と古態―本文批判と作品批評の接点―　（第三部）
（『日本文学の特質』所載）

この三論文が『日本文学原論』本文批判編の基底を示されたものなのである。これに、

解釈と批評の原理　（韓国日語日文学会紀要「日語日文学研究」第二十四輯）

を併せると、『日本文学原論』の全体像が、先生の執筆された文章によって概ね分る。『日本文学原論』は幻の著作になったが、先生は、この四論文を、

『日本文学原論』の御執筆の間に、残して下さったのである。これらを拝読できることは、幸いと言うべきである。

先生が下さった幾通もの自筆書簡の中で断片的に言及しておられる『日本文学原論』の構想と内容と御執筆状況によって、そして、御執筆中に諸所に発表された四編の御論文によって、鶴首したにもかかわらず拝読がかなわないことになった『日本文学原論』ではあるが、粗々とはいえ、以上のとおり辿り得るのである。

先生の御意図は、幾通もの御状によって犬井個人を鍛えようとされるところがあったのに違いない。しかし、それは個人が頂戴するには余りにも貴重な『日本文学原論』の構想と内容と御執筆状況に関するお言葉である。ここに先生に頂いた書簡を広く世に御披露する所以である。

先生から犬井が頂いた書簡よりも更に詳しい事情をお知りの向きは多いはずである。是非ともそれを御教示頂きたい、そして、小西甚一先生のお考えであった『日本文学原論』に関することどもを世に紹介して頂きたい、と願うこと切である。

小西甚一先生の御冥福を心からお祈り申しあげ、筆を擱く。

合掌

犬井善壽氏の申し出により、氏による小西甚一先生の追悼文を、筑波大学平家部会論集の別冊として刊行いたします。

（第十二集編集担当　小井土守敏）

筑波大学平家部会論集　別冊

平成十九年六月三十日　発行

発行者　筑　波　大　学　平　家　部　会

つくば市天王台一丁目一番地一

筑波大学文芸言語専攻日本文学大学院生室内

印刷者　株式会社　イセブ